原風景になっている。それを忠実に写したのが、斎藤牧場の事務所であり牧舎である。ただし、事務所の内部は、武士の子であった斎藤兵太郎の面影が写されている。恐らく、彼にとってこれが自らの手で歴史と文化をつくってゆくのにふさわしい姿に思えたからであろう。

附言

筆者は北海道生まれでなく、北海道に住んだこともない。ただ、日本近代建築の研究者として、乞わるるままに興味を持ち訪ねた斎藤牧場の事務所建築につき考察を試みた。不充分で誤りもあろうことは筆者が最も良く承知している。読者の批判叱正を期待している。

図面については、北海道建築士会十勝支部東十勝分会で作製した実測図を用いた。古い写真については、浦幌町教育委員会後藤秀彦氏が送って下さったおかげで拝見できた。これらの資料がなかったら、とても筆をとる決心はつかなかったろう。深く感謝している。

（日本大学生産工学部建築工学科教授）

引　用　文　献

浦幌町史編さん委員会編（1971）『浦幌町史』　浦幌町

日本建築学会編（1980）『日本近代建築総覧・各地に遺る明治大正昭和の建物』　技報堂出版

日本建築学会北海道支部（1975）『北海道の建築1863－1974』　丸善

北海道建築士会編（1979）『北海道の古建築物と街並み』　北海道建築士会

後藤秀彦・安藤忠司・三浦道春（1985）「厚内・斎藤兵一郎邸の調査について」（『浦幌町郷土博物館報告』第25号）　浦幌町郷土博物館

札幌市教育委員会編（1983）『札幌の建物』（さっぽろ文庫23）　北海道新聞社

擦文竪穴における集石

宮　　宏　明

はじめに

擦文文化の竪穴住居址の床面や竪穴住居址の周辺から時折、長円形の自然礫の集中がみとめられる。長さ７・８㎝、幅５・６㎝、厚さが２・３㎝程の河原石である。

これらの礫の用途がどのようなものであったのか、出土位置や出土状況等から考えてみたい。

拙稿をまとめるにあたって御配慮いただいた後藤秀彦氏並びに御指導いただいた岡田淳子・藤村久和両先生に対して心より感謝申し上げる次第です。

主要遺跡の概要

擦文文化の竪穴住居址を伴う遺跡の発掘調査例は、今日50遺跡余を数えるが、そのうち本稿では主要な20遺跡の事例について比較検討を加える。以下、遺跡ごとに集石と竈の位置関係に限定し、その概要について述べることにする。

浦幌町十勝太古川遺跡（明石他　1973）

Fig.1のように第１地点（１号～７号竪穴）における集石の出土状況には興味深いものがある。１号竪穴（Fig.2）から東へ３ｍ程のところには20個の礫によって構成されている集石ａが検出された。すぐ近くには紡錘車（註１）も出土している。野外におけるこの種の作業空間として位置づけられよう。同様に５号竪穴南側の集石ｄ、７号竪穴東側の集石ｆ、11号竪穴北側の集石ｇ等があげられよう。竪穴内においては南壁際から検出される傾向がある。これは竈が東側にあるということと密接な関係がありそうである。Fig.1のように本遺跡の竪穴に伴う竈はいずれも東側に向いて構築されている。

浦幌町十勝太若月遺跡（後藤他　1974）

第３号住居跡及び第４号住居跡にはそれぞれ１カ所づつの集石がみられる。３号は竪穴東側より、４号は北側より検出された。いずれも10個程度の

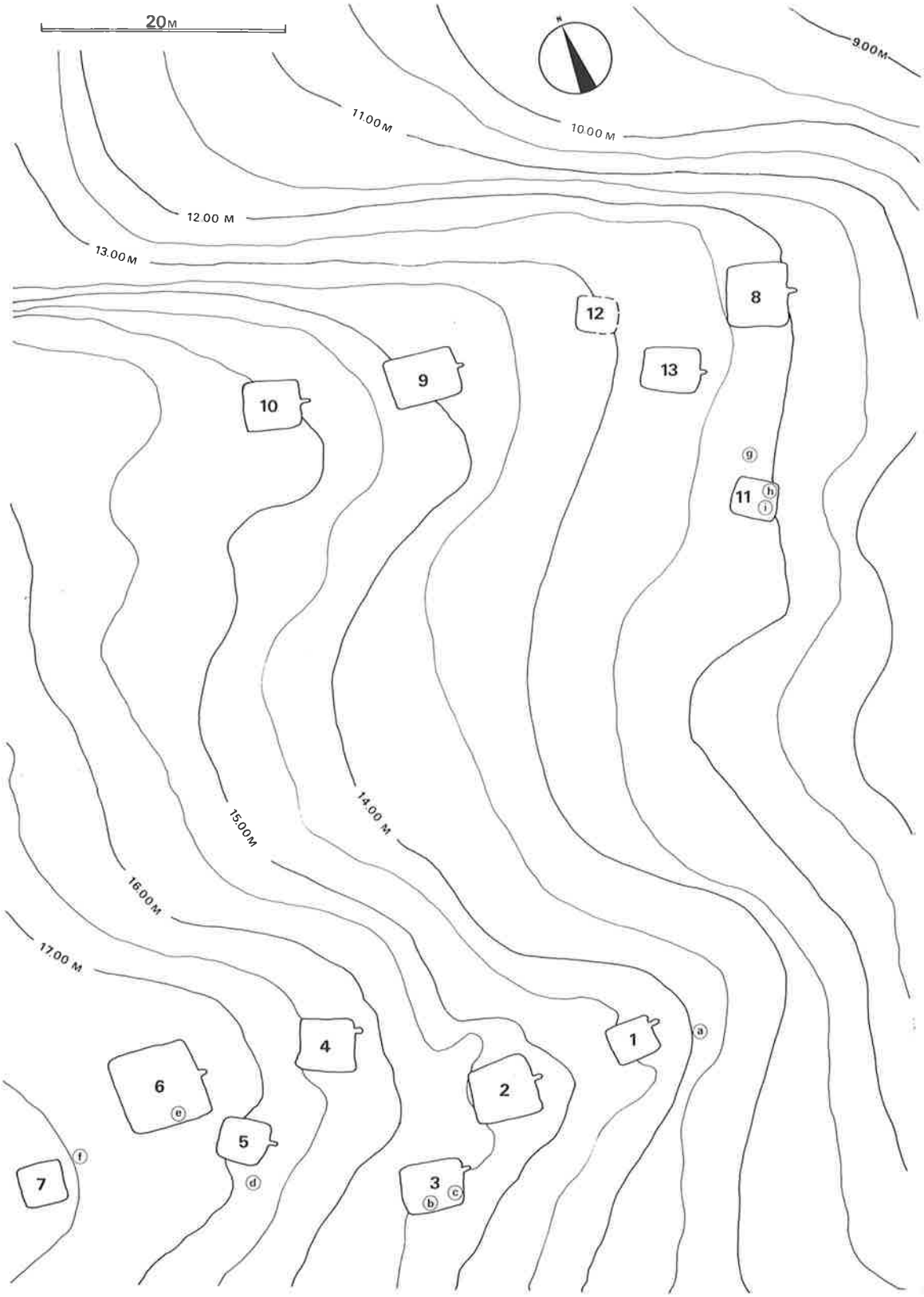


Fig. 1　十勝太古川遺跡の擦文竪穴と集石の分布　(縮尺 1：500)

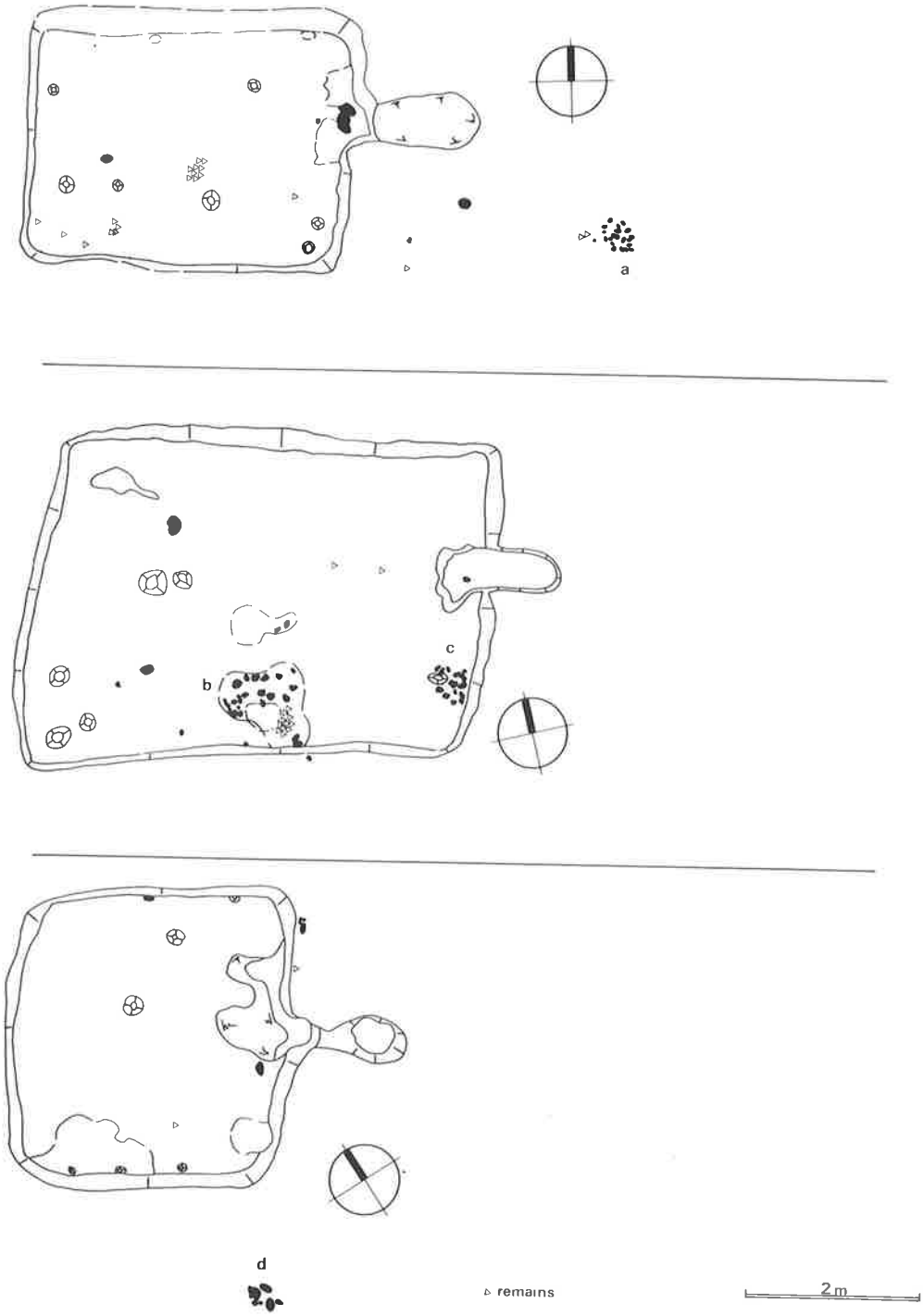


Fig. 2　十勝太古川遺跡の竪穴と集石の位置（Ⅰ）

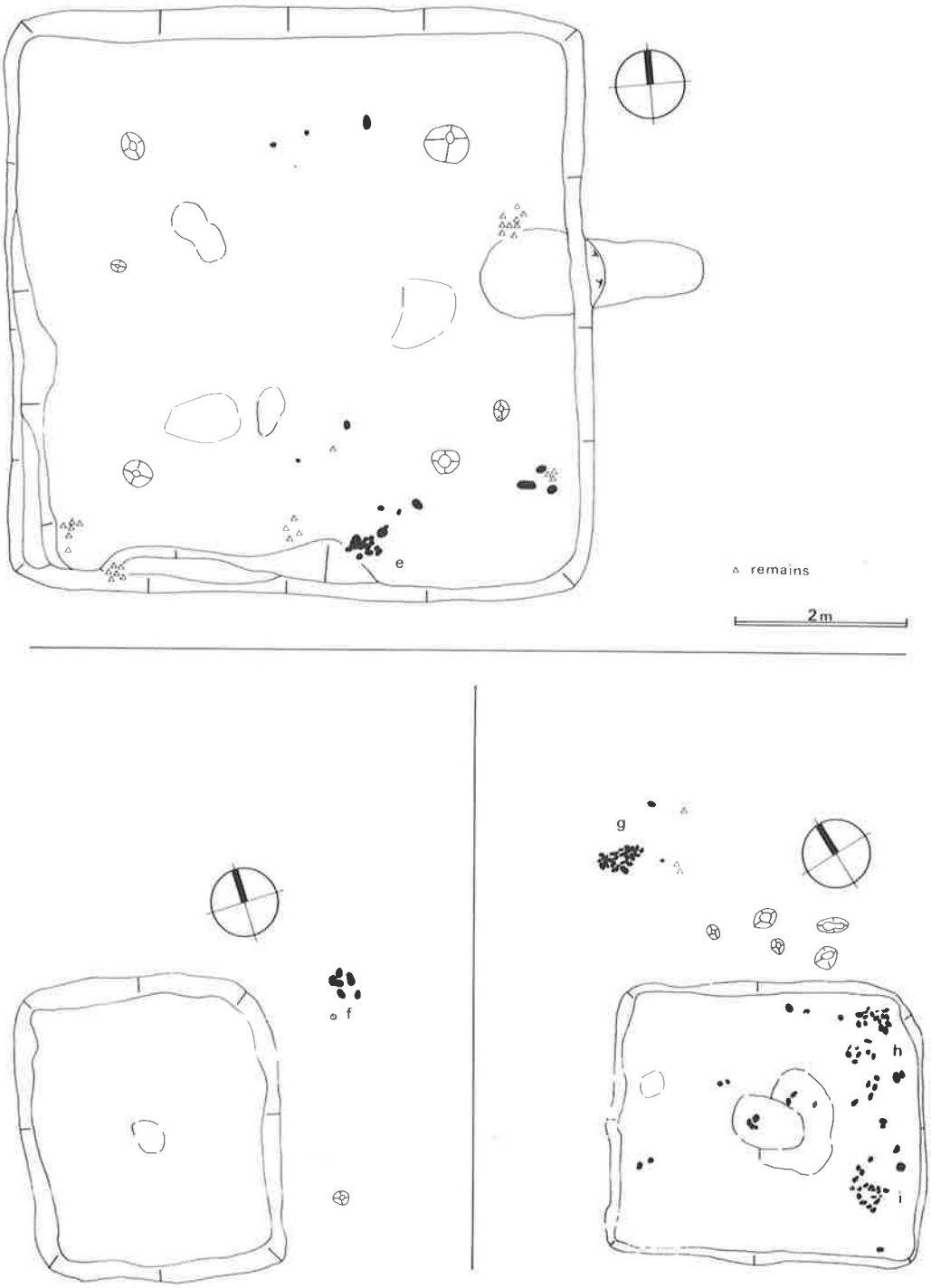


Fig. 3　十勝太古川遺跡の竪穴と集石の位置(II)

河原石によって構成されている。竈の方位は東～南東に集中する。

釧路市緑ケ岡ＳＴＶ遺跡（澤編　1972）

１号住居址の西側から検出された。細長い自然礫40個が40cm×40cm程の範囲に集中していた。竈の方位は一部攪乱のため不明である。

根室市西月ケ岡遺跡（川上・河野編　1983）

１号と２号住居址から集石がみとめられた。いずれも住居址の西側（柱穴付近）に位置する。本遺跡の竪穴における竈の方位は、いずれも南東である。

端野町広瀬遺跡（加藤他　1982）

１号竪穴の西側より検出された。柱穴近くに所在し25個の礫によって構成されている。竈の方位は南東である。

北見市中ノ島遺跡（久保　1978）

６号住居址の西側より19個の礫の集中がみとめられた。６号住居址をはじめ本遺跡における擦文文化の竪穴の竈の方位は、いずれも南東である。

常呂町ライトコロ川口遺跡（藤本編　1980）

４号・７号・10号の各竪穴から集石がみとめられた。４号竪穴西側から57個の河原石を伴う集石が、同様に７号竪穴では北東より70個、10号竪穴では南側より27個が重なりあうことなく出土した。４号と７号は竈の反対、10号は竈に比較的近いところに位置する。本遺跡における竈の方位は、南あるいは南東のものがほとんどである。

常呂町ワッカ遺跡（藤本編　1972）

４号竪穴北側壁寄りから１ｍ×30cm程の範囲に集石がみとめられた。竈の方位は南東であり、この集石は竈のほぼ正反対に位置する。

枝幸町ウェンナイ２遺跡（佐藤　1983）

第１号竪穴住居址の西側より10個ほどの礫による集石がみとめられた。本遺跡の竪穴における竈の方位は、いずれも東である。

枝幸町ホロナイポ遺跡（佐藤　1980・1981）

第１地区の１号・15号・19号の各竪穴住居址に集石がみとめられた。15号と19号は、いずれも西側に１号は北東に位置する。15号は２カ所、１号・19号は各１カ所みとめられた。第１地区に所在する擦文竪穴の竈の方位は南～東に構築している例が多い。

第２地区は、２号・３号竪穴住居址に集石がみとめられた。いずれも南西に位置している。第２地区における竈の方位は、いずれも東あるいは南東である。

第３地区では11号・12号・15号・17号の各竪穴住居址より集石がみとめられた。11号と17号は中央部付近、12号は南東の比較的竈寄り、15号は南側に壁寄りから検出された。

1980年調査分の同遺跡第１号住居址でも集石が南東の隅よりみとめられた。竈に向かって右側の隅にあたる。

天塩町天塩川口遺跡（街道他　1976）

２号・３号の住居址より集石がみとめられた。いずれも西側の壁際に所在した。

美深町楠遺跡（鬼柳他　1983）

H-3、H-6、H-16、H-20、H-36～39 の各住居址より集石がみとめられた。竪穴における集石の所在位置は、さまざまであるが、多くの集石は、ほとんど礫が重なり合うことなく出土している。

名寄市智東遺跡（氏江他　1979）

５号・11号の住居址より集石がみとめられた。５号は北と南東に各１カ所、11号は西側に１カ所検出された。本遺跡における竈の方位は、ほぼ東～南に集中する。

羽幌町チライベツ遺跡（石附　1972）

２号・３号・５号・７号～９号・12号の各住居址より集石がみとめられた。竪穴における集石の位置はさまざまであるが竈の方位は、いずれも東あるいは南東を向いている。

小平町高砂遺跡（峰山・宮塚編　1983・宮塚編　1983）

Ａ・Ｂ両地区あわせて208軒という驚異的な調査を実施した擦文文化の大遺跡である。

Ａ地区では、８・52・54・62・63・68・81・88・89・92・96・100・104・105・108・109・111・113・115・120・129・132・134の各竪穴住居址から集石がみとめられた。集石は竪穴の西側に所在する事例が大半である。Ａ地区の竈の方位は南東に集中する。

Ｂ地区では、４・６・７・14・20～22・24・25・34・37・40・41・44・48・54・58・60～62・70・74の各竪穴住居址より集石がみとめられた。Ｂ地区においても竪穴の西側に集石が所在する例が多いといえよう。竈の方位は、やはり南東向きである。

旭川市錦町５遺跡（瀬川編　1984）

ＭＳ41・ＴＲ25の両竪穴より集石がみとめられた。前者は西壁寄り、後者は北東の壁際より検出された。竈の方位は、いずれも南東である。

石狩町八幡町遺跡ワッカオイ地点（横山・石橋編　1975）

Ｃ地区の２号・３号・５号の各住居址より集石がみとめられた。３号住居址の礫は、並列するように出土している。竈の方位は、北東～南に向いている。

札幌市Ｋ460 遺跡（上野編　1980）

８号・９号・12号・14号・15号の各竪穴住居址より集石がみとめられた。竪穴における集石の位置は、さまざまであるが、強いて言えば東あるいは西に所在するものが多い。竈の方位はさまざまであり他の遺跡の事例とは異なっている。

千歳市末広遺跡（田村他　1981）

ＩＨ―36の住居址の北隅と東隅より各１カ所の集石がみとめられた。竈の方位は南側に集中している。

小樽市餅屋沢遺跡（峰山他　1984）

12―11号竪穴式住居跡の竈近くより集石がみとめられた。集石は竪穴の北側に所在する。竈の方位は、北東に向いている。

出土位置

Fig.4の上図は、前述した19遺跡の事例、下図は、高砂遺跡の事例である。20遺跡150カ所に及ぶ集石の位置をオーバーラップさせたものである。

竪穴における集石の位置関係を理解するため便宜上Fig.5のようにＡ～Ｇに分割した。同様な試みは藤本　強氏（1982）・宮塚義人氏（1982）・立川トマス氏（1984）等によりなされているが、筆者は、他の遺物や遺構等の分布も考慮した結果７分割したものである。

集石の分布は、Fig.4のようにＥ区とＧ区においては、きわめて少数例である。Ｂ区から検出されている事例が最も多く、次いでＢ区寄りのＣ区に多いといえよう。

集石における高砂遺跡の事例は、まさに擦文文化のモデルケースといえるものであり、Fig.4の両図は、そっくりである。

出土状況

出土状況で注目される事例は、次のようなものがある。

※１個づつ対向するような並列状態での出土（八幡町遺跡ワッカオイ地点）

※重なり合うことなく、敷きつめたような状況での出土（ライトコロ川口遺跡・楠遺跡・チライベツ遺跡その他）

※漁網が置かれてでもいたかのように壁にもたれたような状況での出土（ライトロ川口遺跡）

このような主要な出土状況から集石の用途を限定できるのであろうか。これらがどのような用途を暗示しているのであろうか。きわめて興味深い。

集石の解釈

集石を構成する礫は、ほとんどが自然の河原石であり加工痕などは認められない。しかし、「長円形」・「楕円形」・「棒状礫」・「卵形小石」等と各遺跡で報告しているように、いずれも比較的定形化しているということで共通している。これらは明らかに目的に適ったもののみを意図的に選択した結果であるといえよう。

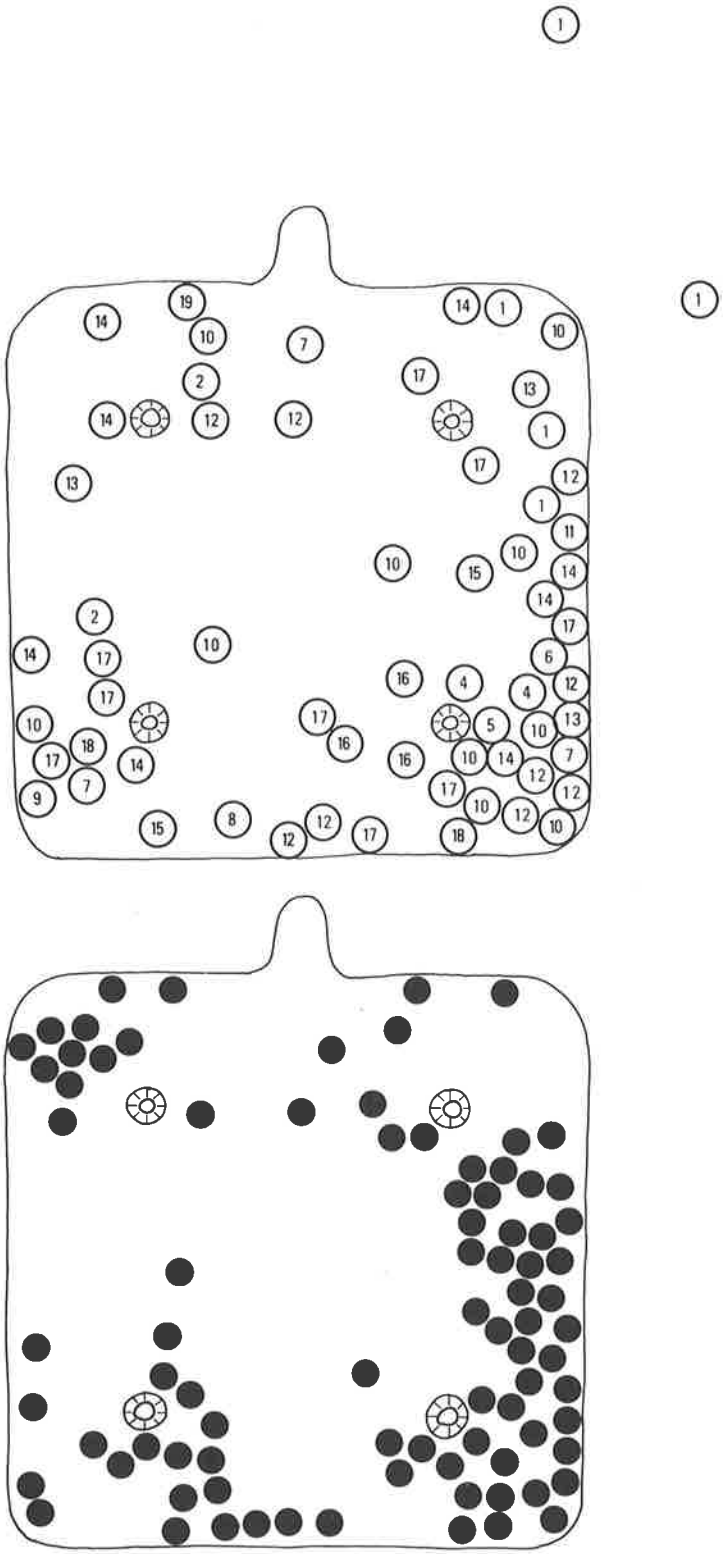
考古学的調査によって検出された集石に、いち早く注目したのは、おそらく児玉・大場両氏（1959）であろう。それは、アイヌ民族が使用した茣蓙（ toma ）あるいは背負い袋（ saranip ）などを編むための茣蓙編機（ itese-ni ）の縦糸の錘（ itese-ni pit）としての用途を暗示したものである。しかし、これは後出のアイヌ民族の事例であるため同様に扱うには、まだ若干の問題が残されているといえよう。

その後、八幡町遺跡ワッカオイ地点、Ｋ460遺跡、ウェンナイ２遺跡、末広遺跡等の報告者が調査所見に基づき同様な見解を述べているところである。

ところが、集石と紡錘車がともにみられる事例が少ないこと等から藤本　強氏（1982）は、これらに否定的な見解を示している。むしろ網の錘としての用途を考えているようである。

アイヌ民族における、男女の分業の実態を明確化することによって、住空間の「聖俗（男女）２分制」を主張する渡辺　仁氏（1980）によれば、織布・敷物編み・袋編み・糸作り等は、女の仕事であり、漁網の製作は、男の仕事であるという。

これは、アイヌ民族における事例であるため鵜呑みにはできないけれども、擦文文化の何らかの文化伝統を継承していると考えられることや、多



①十勝太古川遺跡
②十勝太若月遺跡
③ＳＴＶ遺跡
④西月ケ岡遺跡
⑤広瀬遺跡
⑥中ノ島遺跡
⑦ライトコロ川口遺跡
⑧ワッカ遺跡
⑨ウェンナイ2遺跡
⑩ホロナイポ遺跡
⑪天塩川口遺跡
⑫楠遺跡
⑬智東遺跡
⑭チライベツ遺跡
⑮錦町５遺跡
⑯八幡町遺跡ワッカオイ地点
⑰Ｋ460遺跡
⑱末広遺跡
⑲餅屋沢遺跡
●高砂遺跡

Fig. 4　擦文竪穴における集石の分布

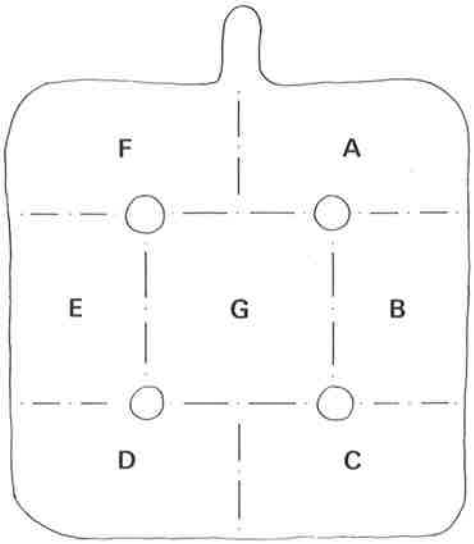


Fig. 5　擦文竪穴の内部区画

くの民族例からも妥当性は高く、傾聴に値いしよう。

前述したように（Fig.4・5）竈に向かって右側のB区・C区に集石が多数みられるということは、女性の空間であった可能性が高いといえよう。これは、土器や紡錘車の出土が、やはり竈の右側に多いということとも一致する。しかし、D区やF区にも少なからずみとめられることをどう解釈すればよいのであろうか。そこで、藤本氏の説が信憑性をおびてくることになるわけであるが、集石と紡錘車がともに検出される事例もけっして少なくない。

いずれにしても集石を構成する礫が錘であったということについては、現状では否定の余地がないといえよう。

擦文文化における集石の集成を通じて感じたことは、十勝太古川遺跡のFig.1のⓐ・ⓓ・ⓕ・ⓖでみられるような竪穴周辺での集石が他の遺跡では、報告例が少ないことである。本来的には遺跡の竪穴周辺において、さまざまな作業を行なったと考えられる。したがって発掘調査に問題があるといえよう。学術調査として行なわれた過去における発掘では、経済的制約等から、ほとんどが竪穴内部の調査に終始する状況であった。また開発行為に伴う大規模な調査においては、あらかじめ上位の遺物包含層を竪穴遺構の確認面まで除去してしまう例も多い（すでに耕作等により攪乱している例も少なくない）。といった状況であり、今後は、竪穴周辺部にたいしても充分な配慮が要求されよう。

今後、留意しなければならないものにウェンナイ2遺跡の2号・3号・11号竪穴住居址から出土した錘様の土製品がある。現状では本遺跡からしか出土の報告がなく今後の資料の増加にかかっているといえよう。これについても集石とのかかわりから再考したいと考えている。

時間的・能力的制約から触れることができなかった多くの問題がある。後続の館報にて、その責を果したいと考えている次第であり、多くの方々からの御指導並びに御鞭撻をお願い申し上げるものであります。　　（日本考古学会々員）

註

註1　「十勝太古川遺跡の紡錘車」『浦幌町郷土博物館報告』第21号のFig.2参照。

参考文献

明石博志他（1973）『十勝太古川・若月遺跡発掘調査概報』　3－9頁
上野秀一編（1980）『札幌市文化財調査報告書』XXII
氏江敏文他（1979）『名寄市智東天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』　41－85頁
鬼柳　彰・立川トマス他（1984）『楠遺跡』　17-189頁
街道重昭他（1976）『天塩川口遺跡』　13－31頁
加藤晋平他（1982）『広瀬遺跡』　3－6頁
川上　淳・河野本道編（1983）『根室市西月ケ岡遺跡発掘調査報告書』　11－24頁
久保勝範（1978）『北見市中ノ島遺跡発掘調査報告書』　31－33頁
児玉作左衛門・大場利夫（1959）「天塩国豊富遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』第14輯
後藤秀彦他（1974）『十勝太若月』　14－16頁
佐藤隆広（1980）『ホロナイポ遺跡』

――――（1981）『ホロナイポ遺跡』Ⅱ　7-8頁
――――（1983）『ウェンナイ２遺跡』　9-56頁
澤　四郎編（1972）「釧路市緑ケ岡ＳＴＶ遺跡発掘調査報告」『釧路市立郷土博物館紀要』第１輯　５－７頁
瀬川拓郎編（1984）『錦町５遺跡』　31―51頁
立川トマス（1984）「竪穴住居内における遺物出土の位置等について」『楠遺跡』　187-189 頁
田村俊之他（1981）『末広遺跡における考古学的調査』（上）　49―52頁
――――編（1985）『末広遺跡における考古学的調査』（続）　132-134 頁
藤本　強編（1972）「ワッカ遺跡」『常呂』　245-248頁
――――編（1980）『ライトコロ川口遺跡』　20―52頁
――――（1982）『擦文文化』　150-159 頁
峰山　巌他（1981）『オピラウシュペツ遺跡』42―43頁
――――・宮塚義人編（1981）『オピラウシュペツ遺跡』　20頁
――――・――――編（1983）『おびらたかさご』
――――他（1984）『蘭島餅屋沢遺跡』　16-18頁
宮塚義人編（1983）『おびらたかさご』
横山英介・石橋孝夫編（1975）『Wakkaoi』　21―33頁
渡辺　仁（1980）「屋内生活空間の聖俗（男･女）の２分制」『ライトコロ川口遺跡』　85―97頁

浦幌町の古地名に関するメモ

後　藤　秀　彦

1643（寛永20）　日本旅行記
タカプチー・マツナイ
1644（正保元）　正保日本図
トカチ
1669・1670（寛文９・10）　津軽一統志
とかち
1697（元禄10）　元禄御国図絵
とかち
1712（正徳２）　和漢三才図絵
トカチ
1720（享保５）　蝦夷志
トカチ
1726（享保11）頃　蝦夷商買聞書
トカチ
1781（元明元）　松前志
トカチ
1781～88（天明期）　蝦夷拾遺
トカチ
1788（天明８）　寛文拾年狄蜂起集書
大とかち
1789（寛政元）　寛政蝦夷乱取調日記
とかち・こぶから石
1802（享和２）頃　東案内記
ヲコシヘ
1808（文化５）　蝦夷日記
戸勝
1808（文化５）　東蝦夷地各場所様子大概書
ヲコツヘ・コブカライシ・とかち・うらほろ・へっちやろ・たんさの
1824（文政７）　蝦夷地名考並里程記
トカチ・ヲコッペ・チウクベツ
1837（天保８）　日鑑記
トカチ川渡船
1842（天保13）　唐太話
トカチ
1856（安政３）　協和使役
チュクベツ川・ヲトンベ・アブナイ・ヲニヲフ・ヲコチベ川・コンポガルシ・タマネビラ・トカチ川
1856（安政３）　トカチ場所支配人通詞番人稼方名前書
オコツヘ・トカチ
1856（安政３）　竹四郎回浦日記
チョクベツ・ヲトンヘ・アブナイ・ヲコツヘ・チカホヤニ・コンブカルウス・クマ子ヒリ・トカチ・ウラホロ・トイトウ・ヲベツコウシ・ベ